

学力のとらえ方の変更で授業はどう変わるか

— 新学習指導要領を批判的に読み解く —

常任委員 金子政彦

1. 学習指導要領改訂へ向けての中教審審議の下地にあったものは何か

昨年(2017年)3月31日に告示された新学習指導要領では、どの教科の目標にも「見方・考え方」なる文言が盛り込まれているとともに、「資質・能力」という文言も随所に見受けられる。この文言があるのはなぜなのかを考えたとき、今回の学習指導要領の改訂で学力のとらえ方が大きく変わったと見れば、納得がいく。

ところで、今回の学習指導要領改訂にあたって、その方向性を規定するべく、文部科学省は「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」を立ち上げ、その検討結果に沿って議論を進めるよう提言を出したうえで中教審に諮問をしている。その提言によると、従来の学習指導要領を根本的に見直し、育成すべき資質・能力を明確化すること、学習内容を提示するだけでなく、指導方法まである程度盛り込むこと、学習評価を改善することを求めている。

また、求められる資質・能力として、思考力を中核とし、それを支える基礎力と使い方を方向づける実践力の三層構造で考えるべきと提言している(後掲の資料参照)。

2. 中教審答申をどのように読み取るか

今回の改訂学習指導要領作成の元となっている中教審答申をその概要から見てみたい。以下、答申概要の抜粋である。(文中の波線は筆者による)

現行学習指導要領は、各教科等において「教員が何を教えるか」という観点を中心に組みられており、一つ一つの学びが何のためか、どのような力を育むものかは明確ではない。このことが、各教科等の縦割りを超えた指導改善の工夫や、指導の目的を「何を知っているか」ととどまらず「何ができるようになるか」に発展させることを妨げている背景ではないか。

新しい学習指導要領等に向けては、以下の6点に沿って枠組みを考えていくことが必要となる。

- ①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)
- ②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
- ③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
- ④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)
- ⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
- ⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

教科等と教育課程全体の関係や、教育課程に基づく教育と資質・能力の育成の間をつなぎ、求められる資質・能力を確実に育むことができるよう、教科等の目標や内容を以下の三つの柱に基づき再整理することが必要である。

- ①「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」

- ②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」

各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすのが「見方・考え方」であり、教科等の教育と社会をつなぐものである。子供たちが学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせられるようにすることにこそ、教員の専門性が発揮されることが求められる。

様々な資質・能力は、教科等の学習から離れて単独に育成されるものではなく、関連が深い教科等の内容事項と関連付けながら育まれるものであり、資質・能力の育成には知識の質や量が重要である。こうした考えに基づき、今回の改訂は、学びの質と量を重視するものであり、学習内容の削減を行うことは適当ではない。

（「深い学び」と「見方・考え方」）

学びの「深まり」の鍵となるのが、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」である。「見方・考え方」は、新しい知識・技能を既に持っている知識・技能と結びつけながら深く理解し、社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものである。「見方・考え方」を軸としながら、幅広い授業改善の工夫が展開されていくことを期待する。

観点別評価については、目標に準拠した評価の実質化や、教科・校種を超えた共通理解に基づく組織的な取組を促す観点から、小・中・高等学校の各教科を通じて、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理

家庭科、技術・家庭科家庭分野においては、家族・家庭生活、乳幼児、高齢者、食育、日本の生活文化、金銭管理、消費生活や環境に配慮したライフスタイル、生涯の生活設計等に関する内容や学習活動を充実する。

技術・家庭科技術分野においては、情報の技術に関して、プログラミングや情報セキュリティについて充実する。また、知的財産を創造・保護・活用する態度や技術にかかわる倫理観の育成等を重視する。

3. 中教審答申を読み取ったうえで新学習指導要領を改めて読み解いて授業改善に生かす

「技術・家庭科は、小学校にも高等学校にもない、中学校だけにある教科である。この教科の学習に特に関係の深い教科は、数学科、理科、社会科で、これらの教科で学習したことを授業の中で積極的に活用していく。もちろん、これ以外の他の教科や小学校で学んだことも活用して学習を進めていく。したがって、技術・家庭科はいろいろな教科の学習事項を活用して授業を進めていく総合的な教科なので、他の教科の学習もしっかりやるように」。

これは、1年の最初の授業で、私が生徒たちに必ず話してきた内容で、技術・家庭科を3年間学習していく意義を伝えるようにしてきた。実際には、具体的な例をあげながら話をするのだが。そして、3年間の学習で“技術的なものの見方・考え方”が身につくよう、意図的に授業をしくんでいった。

確かに、現行の学習指導要領の目標には、私の考えているようなことは明記されてい

いが、そのように読み取ったのである。ところが、今回の学習指導要領の改訂で大改革がなされたと見ている。

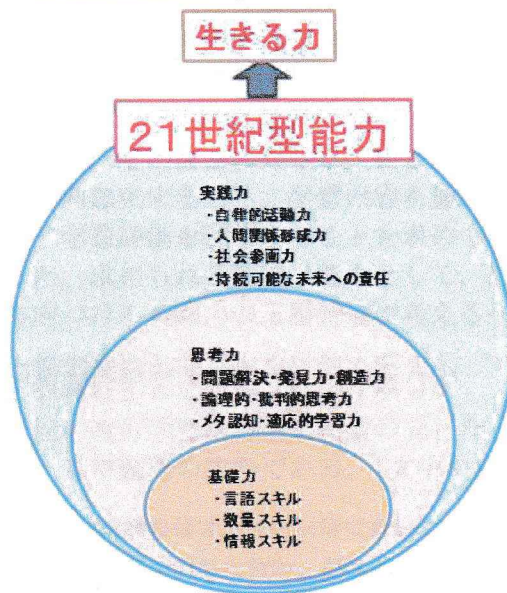
これまでどおりの授業を続けていてよいものか。皆さんとともに考えていきたい。

<資料>

資質・能力を踏まえた教育目標・
内容・評価の在り方に関する検討会（第9回）
平成29年6月27日 配付資料
（国立教育政策研究所）

求められる資質・能力の枠組み試案

21世紀型能力：「生きる力」としての知・徳・体を構成する資質・能力から、教科・領域横断的に学習することが求められる能力を**資質・能力として抽出し**、これまで日本の学校教育が培ってきた資質・能力を踏まえつつ、それらを「基礎」「思考」「実践」の観点で再構成した**日本型資質・能力の枠組み**である。



①思考力を中核とし、
それを支える②基礎力と、
使い方を方向づける③実践力
の三層構造

- 1) 実践力が21世紀型能力、引いては生きる力に繋がることを示すために、円の最上に位置づけ
- 2) 3つの資質・能力を分離・段階的に捉えず、重層的に捉えるため、3つの円を重ねて表示（例：基礎力は思考力の支えとなるが、思考力育成に伴って基礎力が育成されることもある）
- 3) いかなる授業でも3つの資質・能力を意識して行うために、3つの円を重ねて表示

各能力の下位要素については、さらに検討を進めている